

源氏物語の研究

——二条東院から六条院へ——

中 村 文 美

六条院構想は、源氏にしてみれば単に豪華な庭園を造ろうという意味だけではないはずである。以前から関係のあった女性を一つ所に集め、温情を示す場であり、季節によって秩序づけられた

女性達の中央に位置して栄華を謳歌する場、一大理想の楽園を築き、みやびの業を実現すると場として設定されているのである。

光源氏を取り巻く女性達との様々な人間関係のあり方は、いわば人生の縮図とも言うべきものであり、正篇の中心の場である六条院に集められた女君は、源氏が何らかの意味で重んじている人である。何故彼女達が選ばれたのか、その必然性を探っていくというのが、このテーマを取りあげた最初の動機であった。

六条院の前奏であるところの二条院は、もと光源氏の母桐壺更衣の里邸であり、彼の最愛の紫上が生活する場である。源氏が栄華への道を歩むにつれ、同じ邸内に東院が改修され、ここに花散里、末摘花などが加わる。明石君はここには入らず、新しく設定

された大井山荘に移り住む。そして、各々の世界に住む女君達が少女巻において新たに物語に登場してきた六条院に集合するのである。

二条東院から六条院へ移ったのは如何なる理由によるものだろうか。各々の造営事情を明らかにすることが、物語の構想、手法を明らかにする上にも役立つと考えられる。この論において、二条東院、大井山荘、六条院の設立理由、存在意義を考えていくことにより、正篇の中心の場である六条院構想の必然性を探り、あわせて、作者がこの物語を書き進めていくにあたっての構想、及びその方法なるものを考察していくつもりである。

(この論における引用文は小学館日本古典文学全集による)

第一章 二条東院と大井山荘

(一) 二条東院

須磨・明石流謫の生活に終わりを告げ、源氏は政界に復帰する。冷泉帝即位に伴う新体制確立に際し内大臣に就任。榮華の道を歩み始めたところで突如次のような記事が出てくる。

二条院にも同じごと待ち聞こえける人を、あはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将中務やうの人々には、ほどほどにつけつつ情を見えたまふに、御暇なくて、外歩きもしたまはず。二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなど、思しあててつくろはせたまふ。 濡標回二七四頁

二条東院造営に關する記事であるが、その他東院についてのいくつかの叙述からも明らかのように、今までの人生の総決算であり、新たな人生の出発の巻であるところの濡標巻において、源氏の新しい生活の場として登場してきた二条東院は、これまでにかりそめにも情を交した女性達を一所に集め、後見をすることをその目的としている。

しかしながら、源氏の帰京後の変貌を考えてみると、それが単に「御暇なくて」自由に「外歩き」をすることができないために

なされたのではないことが明らかになってくる。苦い経験をした源氏は人の心の頼み難いことを知る。融和政策を採る甘さのなくなった源氏は、自分に対して信実であった者とそうでなかった者へ対照的な扱いをする。ここで、二条東院造営を要請し、そこに入居せしめられた女君達に一つの共通点があることに気づく。すなわち、源氏の須磨流謫にまつわる人達だということである。明石君は苦しい流謫生活がなかったら知り合うべくもなかった女性であるし、花散里、五節は共に源氏悲境の花散里巻に登場した女性であり、悲境の時になつかしく呼び起こした女性なのである。物語の表面には登場していないが、源氏にはかりそめにも情を交した女性が沢山いた。その中からこの二人が特に呼び起こされたということは、その折の源氏の心に最も調和した女性であるということになる。花散里、五節、さらに未摘花は、源氏不在の苦しい世の中においても心を変えず源氏のみを信じていた女性である。

以上のように見ていくと、二条東院の造営目的は、単に以前関係のあった女性を入居させるにあるのではなく、源氏の悲境の折に心を変えずに彼を信じて待っていた、誠実なる女君の入居にあったと考えることが可能となる。二条東院は「御暇なくて外歩き」もできない源氏が、自分に対して信実であった女性達に二度

と生活上の心配をさせないように、一所に集めて後見するために造営されたのである。

(二)大井山荘

東院に入った花散里と東西の対に住む予定であった明石君は、一体どうしていたのであろうか。松風巻で東院造営の事実が告げられ、東の対は明石君のためと予定されていた。しかも明石姫君のために造営を急がせたとも書かれている。源氏は予言を信じ、将来この姫君を入内させようと考えているので、このまま明石に住んでいることは甚だ不都合なことだと思っている。身分の低い女の娘であるということに加えて、田舎育ちであるという世評をこうむることになるからである。姫君のため、我が権勢確立のため、に急ぎ上京させる必要があったのである。明石君は悩んだあげく、母尼君と共に姫君を連れて上京するが、東院へは行かず大井山荘に入った。これは如何なる意味を有するのであろうか。

先ず、明石君について語られる時、常に問題とされる「身の程意識」について触れておく。

(1)かの国の前の守、新発意のむすめかしづきたる家、いといたしかし。大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、交らひもせず、近衛中将を棄てて、申し賜はれりける司なれど、若

紫国二七六頁

(2)代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらに承け引かず。『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを。この人ひとりにこそあれ。思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる。 若紫国二七七頁

(3)いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へん。(中略)年ごろ音にのみ聞きて、いつかはさる人の御ありさまをほのかに見たてまつらなと思ひかけざりし御住まひにて……かかる海人の中に朽ちぬる身にあまることなれ 明石国二四三頁

(3)は明石君自身の考え方を非常によく表現している記事である。如何にも苦勞の身に染みた、田舎育ちの受領の娘らしい諦めとも言える自己卑下がある。一方、彼女の父明石入道は(1)の記事に見えるように、その父親は大臣にまで任じられた程の名家の出であり、自らも貴族の登龍門とも言うべき従四位下相当の近衛中将に補せられたという人である。そのような名流名家の人が自ら従五位上相当の播磨守に降転したのはそれなりの理由があろうが、彼は娘に対して高い望みを持ち、(2)の記事にあるようにその志が遂げられなかったら「海に入りね」と常に言い聞かせていた。また娘もそのつもりでいた。このように見ていくと、明石君の高い

志とこれに反する自卑とは、家柄の高さの自覚と受領宿世の現実との板挟みに因るものであることがわかる。国中の武士達の求婚を悉く振り捨てて多くの人の恨みをかうというような高慢とも言える態度も、つまりは甚しい自己卑下の裏返しにされたものにはかならないのである。彼女が源氏に対する時、「身のほれど知らて」「身の程のいみじうかひなければ」というようにに常に自己を卑下している。彼女の心理は、上流貴族への憧れと、より一層、身の程にまつわる不安に貫かれていると言っても過言ではない。

濡標巻の住吉参詣の段において、この身分隔差が明瞭になり、そのための彼女の嘆きが以後語り続けられることになる。

げに、あさましう、月日もこそあれ、なかなか、この御ありさまをはるかに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ。さすがにかけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて仕うまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかなく思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らで立ち出でつらむなど思ひつつくるに、いと悲しうて、人知れずしはたれけり。 濡標 二

九二頁

これまでも常に身の程を意識してきたわけだが、この段はそれによりはつきりさせるために、また、以後の彼女の行動を制約するために設けられたと言つてよいだろう。つまり、二条東院に迎え入れようとの源氏の考えを示したあとでこの住吉参詣の段を設定

することによって、身分隔差を一層明瞭な形で表わし、源氏の考えが簡単には実現されない状況を作り出しているのである。

明石君が東院に移り住むことを拒否した理由はこの身分隔差にほかならない。彼女は東院に入居した時の状態を考える。この上なく高貴な人でさえ冷淡な源氏のお仕打を始終見せつけられ、辛抱強く訪れを待つという状態である。そのような中に出ていったまにしか訪れがなかったなら、ますます我が身の程が自覚され嘆くことになる。かといってこのままでは姫君の将来が心配である。というように、彼女は妻としての立場と母としての立場の間に立たされて悩み続けるのである。父入道はすぐにも源氏のもとへと望み、母尼君はもとから気が進まない。三人それぞれの気持ちの折衷策として、大井への移住が考えられるのである。

ここで作者は明石君を移り住まわす外的条件を、この大井山荘に賦与することを忘れていない。(1)母尼君の祖父、中務宮が領有していた山荘 (2)母尼君と共に住む (3)「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」「家のさまおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず」(松風巻)とあるように、山荘の風情が明石浦に似かよっている (4)源氏の造営である嵯峨の御堂や桂の院が近くにある 以上のようことが条件として与えられ、明石君がここに住むこと

に対して何の不自然さも感じさせない。特に、長年住み慣れた所を離れるのであるから、(3)の条件が重要であることは言うまでもないことである。さらに(4)の条件により、源氏は紫上に対して、訪問の口実を与えることが可能となっている。

このようにして、明石姫君が二条院に引き取られた後の寂しい生活に耐えさせるよすがとしているのであるが、これはまた、源氏をして明石君の自ら一步退いた慎重な態度に感服せしめることにもなるのである。源氏は明石君を東院に迎え入れようとは考えていたものの、田舎育ちの身分の低い彼女が、都の夫人達とうまく交際していくことができるかどうか内心不安であったので、このような身の処し方をした明石君に対して、「口惜しからぬ心の用意かな」と、改めて彼女を見直すことになるのである。

以上のように見ていくと、大井山荘は、明石君の奥ゆかしさを源氏に改めて見直させる役目を果たすと共に、彼女が都のやむごとなき際の人達の中に出ていくための予備的段階として登場してきたことがわかる。明石君はことあるごとに、やむごとなき人顔負けの女性とされている。これは、源氏のお相手を努め、その間に中宮の位に即く程の娘を生む人としての資格として必要であったためと考えられるが、実際に都の高貴な夫人達と交わっていくためには、もうしばらくの間この大井山荘に留まって、性格作り

をする必要があったのである。

さて、明石姫君がここから二条院に引き取られていくことについては、章を改めて述べることにして、ここでは、明石君が入る予定であった二条東院とこの大井山荘を比較しながら論を進めていくことにする。

東の院の対の御方も、ありさまは好ましう、あらまほしきさまに、さぶらふ人々、童べの姿などうちとけず、心づかひつつ過ぐしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇のひまなどには、ふと這ひ渡りなどしたまへど、夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまはず。ただ御心さまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつつ、あり難きまでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよならずもてなしたまひて、悔りきこゆべうはあらねば、同じごと、人参り仕うまつりて、別当どもも事怠らず、なかなか乱れたるところなくめやすき御ありさまなり。 薄雲四二七頁

これは二条東院西の対に移り住んだ花散里の程合いを心得た様子である。「近きしるしはこよなくて」とあるように、遠く大井に住む明石君への訪問は稀であるが、花散里は近くに住んでいるので源氏の訪問をしばしば受ける。しかしながら、「夜たちとまりなどやうにわざとは見えたまわず」という程度の扱いに甘んじている。自分の運命はこの程度のもものと諦めてあっさりと全てを任せきっているので、紫上の脅威の対象となり得ていない。それ

に對して、大井山莊に移り住んだ明石君は、紫上に嫉妬の情を起こさせていた。源氏が稀にはあるがわざわざ訪問する女性として、軽くは見られなかったのであろう。花散里の身の処し方は、諦めと、他の人との融和を保つという事に尽きるが、明石君は、そのような東院の女性の生き方とは全く異なった道を探っているのである。

つまり、明石君によって二条東院のあり方がはっきりするのだが、彼女によって照らし出された二条東院は、平和的であり、あくまでも紫上を頂点とする緊張感のない世界である。東院の女性達は、源氏の愛情を中途半端にしか受け得ないことに不満を感じていない。明石君は、東院に入ることイコール愛人としての立場を失うこと、という関係を見抜いていたと見てよいであろう。彼女は花散里とは違う。身分こそ低いけれども、人柄、経済力という点では、都の夫人達に劣りはしない。それだけに、あっさり二条東院に移って、紫上や花散里よりも下に見られるような生活をしたくないと思っている。東西の對に入るといっても、東院は花散里を主人として建てられた所であり、その東院を含む二条院は、紫上の空間なのである。明石君は中途半端な愛情で満足するような女性ではない。あくまでも身を高く持し、愛人としての立場を失いたくないと思っているのである。

以上のように、大井山莊に移り住む明石君を設定することで、二条東院の女性達を振り返る機会が与えられているわけである。二条東院はその造営目的を、源氏の悲境の折の心の誠実なる女君の入居というところに求めていたのであり、今や、紫上の脅威の対象ともならない平和的な完結した一つの世界であるので、これ以上物語を展開させるエネルギーを内包していない。新たにこの二条東院を拒否する明石君の場面としての大井山莊を設定することが、すなわち、物語を進展させていくことになるのである。つまり、二条東院は初めから明石君に拒否されるように造型されていたのであり、大井山莊は東院入りを拒否した明石君の唯一の身の置き所として、さらに、物語を新たな展開の途につかせるために登場してきたのである。身の程を意識する明石君にふさわしく寂しい所であり、やむごとなき際の人達と對等に伍していけるだけの性格作りが、ここにおいてなされるのである。

明石君が東院に入らず、大井山莊に移住したということが、後の六条院造営に大きなかわりを持つことになるのであるが、このことについては章を改めて述べることにする。

第二章 二条東院から六条院へ

(一) 秋好中宮側からの要請

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見どころありて、ここかしこにておぼつかなき山里人などをも、集へ住ませんの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御旧き宮のほとりを、四町を占めて造らせたまふ。 少女図七〇頁

六条院造営の事実が告げられる。この文章からもわかるように、その造営目的は明石君を中心とする「おぼつかなき山里人などを」一所に集め住まわすことにある。二条東院の時と変わりないような印象を受ける。この章以下、何故六条院造営は必要だったのか、その必然性を考察しながら、あわせて、二条東院と六条院のかかわり方を探り出し、作者のこの物語を書き進めていくに当たった方法なるものを明らかにしていきたいと思う。

さて、「おぼつかなき山里人などを」一所にまとめて住まわすということについて、遠く桐壺巻の終わりに次のような記事があったの思い出す。

内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、まかで散らすさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひおもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる。かかる

所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばやとのみ、嘆かしう思はわたる。 桐壺図一二六頁

桐壺更衣の里邸、後の二条院改修についての記事であるが、この最後に「思ふやうならむ人」つまり、藤壺のような人と暮らせた、ということが述べられている。藤壺は源氏にとって永遠の女性であるが、彼女と暮らすことは不可能である。そこでその見果てぬ夢を藤壺ゆかりの姫君を含む複数の女性の集合を持って果たそうとしたのが、この六条院構想の原点ではなかったのだろうか。

一方六条院造営について考える時、その所在地が、「中宮の御旧き宮のほとり」であることに着目する必要がある。少女巻にも「未申の町は中宮の御旧宮なれば、やがておはしますべし」とあるように、旧き宮そのもの、またそこを包み込んだの改築であったことがわかる。このことを考えていくにあたって、先に冷泉帝に入内した六条御息所の娘、斎宮女御の方に焦点をあてていくことにする。

濡標巻に彼女を紫上の良き話し相手として二条院に連れてくる計画が述べられていたが、これは絵合巻において断念され、宮廷より退出するという形で二条院の寝殿に入る。彼女は源氏の養女として入内していたので、退出する里邸が源氏邸であるのは当然

であるし、東の対に源氏、西の対に紫上が住み、寝殿が空いているのであるから、ここに退出するという形は少しも不自然さを感じさせない。しかしながら、この二条院は今や紫上によって秩序づけられる彼女の空間となっている。前坊の娘、冷泉帝入内という身分からも紫上を主人とする二条院へは入るべきではないのである。

それでは何処に入るのが適当なのだろうか。同じ邸内に二条東院があり、その寝殿が空いていたことに気づく。彼女はここに入るべき人であったのだろうか。東院寝殿に入り得た女性^(註1)は秋好中宮であり、彼女がそこに入らなかった故に二条東院物語が挫折したのである、とする大朝雄二氏の御説がある。しかしながら次のような記事がある。

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありて、こまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらひどもしおかせたまへり。

松風図三八七頁

素直にこれを読むなら、東院の寝殿に誰かを迎える意図があったとは断言できない。二条東院はその描写からも明らかなように、

花散里を主人として考えられたものであるから、彼女より上位の人がその寝殿に入るということは考えるべきではない。本文通り、東院の寝殿は、源氏が時々渡っていく場所と見るべきであろう。

以上の如く考えていくと、秋好中宮の里下りの時の邸は、二条院、二条東院以外でなければならないことになる。彼女は一体何処に入るのが適当なのだろうか。彼女を主人とする邸が必要なのである。とすれば、彼女の旧邸がその候補にあがるのは当然の成り行きであると言えよう。

一方、彼女の母六条御息所は源氏との恋に苦悩の限りを尽くし、娘を頼む旨の遺言を残して亡くなる。源氏の好色心に釘をさすような彼女の遺言が、ともすればぐらつきがちの源氏の行動を、そして物語の展開を規制することになる。

ところで御息所は遺言の他にもう一つこの世に残したものがあつた。死霊である。それは伊勢からの帰京後住んでいた所、御息所がそこで死んだ所の「六条の旧宮」に留まっているはずである。御息所に負目を持ち、生霊事件を忘れ得ない源氏は、娘秋好中宮を手厚く扱うことによって遺言に報い、その死霊を鎮魂しなくてはならない。つまり、秋好中宮は二条院あるいは東院に退出するのではなく、この六条御息所の故地へ退出しなければならな

かったのである。この場所で手厚く扱われてこそ鎮魂は完璧となるのであり、逆に言うなら、鎮魂のためにも秋好中宮を主人とする邸が必要だったのである。

六条院は「六条京極のわたりに、中宮の御旧き宮のほとりを、四町占めて」造られた。「未申の町は、中宮の御旧宮なれば」とあるように、西南の町が「六条の旧宮」にあたる。従って秋好中宮こそが真の主人となり得るのである。御息所に対する悔恨の情が強ければ強いほど、源氏は秋好中宮の後見に一層心を掛ける。そうすることがすなわち、六条院の栄華を獲得していくことになるのである。秋好中宮側からの要請を受けた六条院造営の構想は極めて必然的なものであったと言ってよいであろう。

(二) 明石君側からの要請

源氏からの度々の要請を受けて遂に父入道と別れて大井山荘に移った明石君は、ここで寂しい生活を送り始める。待ち兼ねていた源氏との逢瀬。この時も源氏は二条東院に移ることを勧める。

ここにも、いと里離れて、渡らむことも難きを、なほかの本意ある所に移るひたまへ 松風四〇〇頁

さらに造園などを指示するのであるが、その際も、もし大井の邸を立派に修復してしまったなら、明石君が東院に移り住むように

なった時、邸に執着するかも知れないと懸念して簡単にしつらえさせている。あくまでもこの時点における源氏は、明石母娘を二条東院に迎え入れようと考えていたと見てよいであろう。だがしかし、明石君はなかなかここを動こうとしない。そこで、

いかにせまし。隠ろへたるさまにて生ひ出でむが、心苦しう口惜しきを、二条院に渡して、心のゆく限りもてなさば、後のおぼえも罪免れなむかし 松風四〇四頁

と、明石姫君を引き取ろうという源氏の考えが述べられる。姫君かわいさもあるが、姫君を后がねとして養育しなければならぬのにもかかわらず、ここにいたのでは後の世間の受けが悪くなってしまう、といった要請からである。しかしながら、そうすることが明石君にとって如何に酷な仕打ちであるかも源氏は知っている。

明石母娘にしきりに上京を勧め、二条東院を彼女達を迎え入れるために用意したにもかかわらず、源氏が紫上に姫君誕生を伝える言葉「ここにてはぐくみたまひてんや」は、姫君を紫上の養女として二条院に迎え取ることを考えているようにも捉えることができる。予言を信じ、后がねとして宮廷に送り込むためには、入内の際の世間の評判を良くするうえでも一刻も早く京に迎えることが必要であった。人のそしりを受けぬような環境で養育せねば

ならないのである。こう考えていくと、二条院の紫上のもとが最もふさわしいということになる。それならば、二条東院に明石母娘を呼び出しておいて、すぐにまた姫君だけを紫上のもとに連れてくるつもりだったのであろうか。それは明石君にとってあまりにも酷なことである。そこで大井山荘が登場してきたと考えることができる。姫君の出世を念願しながらも身の程を意識して「さし出で交ふ」ことを思い立てぬ明石君にふさわしい上京の拠点として設定されたのである。

ここで一つの疑問が浮かび上がってくる。姫君を紫上のもとに託すのなら、明石君は寂しい思いをしてまで大井山荘に入らなくてもよかったのではないか。父母と共に、住み慣れた明石浦にいた方がよかったのではないか、ということである。これは次のように考えることができる。大井山荘は明石君の性格作りに大きく参与している。あれこれ悩む明石君を描くことで、身の程を強く意識する忍従の人明石君を形成している。つまりここで忍従の生活をしたからこそ、六条院の冬の御方となり得たのである。逆に言えば、冬の御方として六条院に入居せしめる意図があり、その性格作りのために大井山荘は必要だったのである。少し先を急ぎすぎたようであるが、とにかく大井に移るまでは、母娘が離れ離れになるとは思ってもいなかったと見てよいであろう。姫君の

二条院引き取りのことは、明石君に対して嫉妬の情を起す紫上をなだめるために源氏が考えたことなのである。そうすることが結局は姫君のためにもなるという、一石二鳥的な源氏の思いつきと見てよいであろう。従って大井に移ってきた段階では、明石君はあくまでも姫君のために田舎にいてはよくないという理由で上京することを決心したのである。しかしそうかといって、そんなに東院に入るのは彼女のプライドが許さず、他の夫人達と比べられるのも辛いので、大井山荘が考え出されたのである。つまり大井山荘は、妻としての立場を失いたくないという明石君のプライドと、おいそれと都へ出ていける程の身分ではないという自己卑下の、両者を満足させる所であった。大井山荘は、明石母娘にとって必要不可欠な存在であったと見てよいのである。

さてここで、明石君が源氏の度々の要請にもかかわらず東院入りを拒んだ事情を、もう少し詳しく見ていくことにする。源氏は嵯峨野の御堂の念仏会のついでに、月に二度ばかり大井の邸に立ち寄る。非常に心細い様子で暮らしている明石君であるが、大井山荘に住んでさえいれば、ここは遠くて通うのに不便だから仕方がない、と自ら慰めることもできるが、もし二条東院に移って、近いにもかかわらず訪れがたまにしかないというような冷淡な扱いを源氏から受けたとしたら、自らを慰める術もなく、決定的に

絶望するしかないのだと、敗者になり終わった場合を怖れる。さらに、都には自分より高貴な方々が住んでいる。彼女は一貫して身の程意識に悩み続ける人物であるので、肩身の狭い思いをすることがわかりきっている東院に、のこのこと出かけていく気にはなれない。そうかといって大井に留まろうとすると、姫君の将来のことがあるので別れて暮らすより他なくなる。源氏が大井に訪れるのも、姫君見たさのためであろうと考えている明石君である。その姫君がいなくなつては、わざわざ源氏が姿を見せることもなくなるだろうということまで考える。姫君を手離すということとは、母親の立場としての苦しみだけでなく、源氏とのつながりを失うことであり、妻として、一人の女性としての悩みも深刻なのである。母尼君に相談したり、占師に尋ねたりしたのも、その迷いや躊躇いの激しいことを示している。

二条東院への移転を勧める源氏と躊躇う明石君の姿が語られ続け、遂に他にどうすることもできないという形で、姫君の二条院引き取りがなされる。明石君が東院へ移ることを拒む理由を繰り返し描きながら、作者は彼女の躊躇いも当然なら、思いやりのある源氏が、幼い姫君の将来、目前に迫った袴着のことを思えば、母娘を引き離さなければならぬのも無理のないこと、と誰にでも納得できるように物語を進展させている。

雪霰がちに、心細きまきりて、あやしきまきまにもの思ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見たり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出でゐなどもせぬを、汀の水など見やりて、白き衣どものなよかなるあまた着て、ながめゐたる様体、頭つき、後手など、限りなき人と聞こゆとも、かうこそはおはすらめ、と人々も見る。

薄雲四二二頁

雪の降る物侘びしい大井山莊を背景に姫君を手離す明石君の形象には、後の六条院における冬の御方たるにふさわしい充分な配慮がなされていると見てよい。姫君を手離すという苦難に対処する明石君を描くことで、作者は彼女に忍従の人としての性格を賦与している。「いみじうもの思はしき世」を背負ったまま、静かにそれに堪えていこうとする明石君の姿には、何かぴんと張りつめたものがあり、ますます高貴さが強調される。今や六条院の冬の御方としての性質を、完全に具備したと言つてよいであろう。

近き御寺、桂殿などにおはしまし粉らはしつ、いとまほには乱れたまはねど、またいとけさやかにしたなく、おしなべてのさまにはもてなしたまはぬなどこそは、いとおぼえことに見ゆめれ。女も、かかる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりと思すばかりの事はし出でず、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。おぼろけにやむごとなき所にてだに、かばかりもちとけたまふことなく、気高き御もてなしを聞きおきたれば、「近きほどにまじらひては、なかなかいとは目馴れて人侮られな

ることどもぞあらまし。たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心地すれ」と思ふべし。 薄雲四三二頁

作者は東院入りを拒む明石君の姿を何回となく描き、四年の間この山里に閉じ込めておくのであるが、これは紫上や花散里などの高貴な人々の中に出ていける貫禄を、受領の女である明石君に賦与するためであつた。出過ぎもせず卑下もせず、自分の分際をわきまえた明石君の身の処し方は、作者が長い冬の忍従を強いたための結果である。

やむごとなき際の人達の中に出ていくことを恐れていた明石君に対して、作者は、彼女がこの大井山荘の寂しさに耐えながら、そういった人々に劣らない程の風格を身に付けたことを強調する。

この数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは、身のほどにはややうち過ぎ、ものの心などえつべけれど、人よりことなるべきものなれば、思ひあがれるさまをも見消ちてはべるかな。 朝顔四八三頁

幸ひにうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老の世に、持たまへらぬ女子をまうけさせたまつて、身に添へてもやつしめたらず、やむごとなきにゆづれる心おきて、事もなかるべき人なりとぞ聞きはべる。 少女四二九頁

源氏、内大臣、大宮という高貴な人々からも賞揚される程の人となつた。思慮深く、やや葵上や六条御息所に似た冷たさはあるがむしろ気高く清らかな性格であり、温和な紫上と並んで六条院の双壁というに足りる程の女性となっているのである。

以上の如く考えてくると、大井山荘は明石君の冬の御方としての性格作りのために、必要不可欠な場所であつたと言えよう。つまり、大井山荘は先の章ではやむごとなき際の人達の中に入るための準備段階であるとしたが、実は東院に入るための準備段階ではなく、六条院に入るためのものだということが言えることになるのである。

結果として、東院東の対は無用の存在と化してしまった。が、東院は初めから明石君に拒否されるように造型されていたのである。源氏は明石君の東院入りを予定しているが、それはあくまでも源氏の考えであり、作者はそう考えていたとは言ひ切れないはずである。東院はあの時点においては造営の必要性を有していた。妻妾を住まわすためという描写から、読者は当然明石君も入るはずだと考える。そこで作者もそのように記したにすぎないのである。明石君側から東院に入るといふ描写がなされていたとしたら、東院に入らず六条院に入ったという事実が何とも妙な印象を与える。しかしそのような描写はなされていず、あくまでも東院入りを拒否しているのだから、六条院入りの構想が初めからあつたと考えても不自然ではない。それでは何故六条院にはすんなりと入っているのか。紫上は二条東院の女性に対しては何らの不安も抱いていなかったのであるが、明石君に対してだけは危惧の

念を禁じ得ないでいた。姫君引き取りで少しはその気持ちが薄らいでいたものの、かわいがっている姫君に対しても、源氏がわざわざ通う女の娘という点で心に何かすっきりしないものが残っていたはずである。明石君は娘が一層大切にされるようにと都へ出向いていくのであり、そうすることが紫上に、彼女の身の程をわきまえた奥ゆかしさを知らしめることにもなり、紫上の明石君に対する気持ちが軟化していく。つまり、明石君の六条院入居が、姫君と、後に「幸い人」とまで称される彼女の幸福への足掛かりとなるのであり、その第一歩としての明石君と紫上の融和の糸口として、明石君は六条院へ入る必要があったのである。

作者は明石君の六条院入りを予め予定していた。東院には入れるつもりはなかったのである。今まで見てきた如く、大井山荘において六条院へ入るべき資格、条件が与えられている。寂寥、苦悩を忍従していく明石君を、ここにおいて造型せんとしていたわけである。もし明石の浦からそのまま東院に入ったとしたら、高貴な人達から賞賛されるような女性とはなり得ていないはずである。東院の女性は諦めの境地にいる。それでは忍従の生活することによって与えられた冬の御方としてのイメージが生ずる術がない。忍従の生活に耐えたことによって、初めて高貴な人々からも賞賛されるようになったのである。

二条東院は明石君の拒否の対象たることで一つの存在意義を有していたと言えるが、彼女の運命を背負い込むことはできないものであった。それに対して大井山荘は、彼女の唯一の身の置き所であり、来たるべき日に六条院へ移るための性格形成の場、雪解けを待つ忍従の場であった。作者は六条院構想に合わせて、大井山荘において明石君の形象を完成せしめる心づもりを持っていたのである。

さて、六条院の冬の御方たる資格を充分備えた明石君であるが実際に六条院体制に迎え入れられるために、作者は外的条件を整えることを忘れていない。先ず源氏。「『山里の人もいかに』など絶えず思しやれど、ところせさのみまさる御身にて、渡りたまふこといと難し」とあるように、身分が高くなり、思うように明石君のもとを訪れることができなくなってきたということ。明石君の方では、娘も乳母もいないという大井山荘における生活が長くなり、孤独さが増してきているということ。大井という所は山里であるから普通の人でも寂しいと感ずるのに、彼女は父と別れ、最愛の娘とも別れている。もう孤独さは極限状態にまで達しているはずである。そんな明石君を、いつまでも寺籠りに託つての源氏の渡りで放っておくわけにもいかない。作者はこのように、大井山荘から六条院展開への条件を具備させていった。

明石君の唯一の身の置き所であつた大井山荘は、彼女が忍従の人として、やむごとなき際の人達に劣らぬ性格を形成しきつた時、その必要性は消滅してしまつたと言えよう。いつまでもここにいては物語は進展しない。だからといって二条東院に入れるわけにはいかない。そこは明石君に拒否されるように造型されていたのであるから。新たな出発をするためにも六条院が必要だったのである。一町を占めた「冬の町」を備える六条院の成立は、対明石君の側からも要請されるものであつたのである。

(三) 脱二条院の必然性

次に、二条院からの脱却という点に焦点をあてていくことにする。二条院は以前桐壺更衣の里の邸宅であつた。源氏は母によく似た桐壺帝の妃、藤壺を密かに思慕するようになると、こんな所に彼女のような人を据えて住んでみたいと述べる。ここに二条院の愛の巢らしい隠处的性格が窺われる。

また、夕顔との恋の舞台となつた「なにがしの院」。ここにおいても源氏は彼女を二条院へ迎え取りたいと考えている。二条院以外の場所における夕顔との恋は、彼女の死によつてはかなくも終わっている。ということはすなわち二条院が安全な恋の場所であるということを示すことにもなる。つまり「なにがしの院」を設

定したことが、逆に二条院の愛人の隠处的性格を鮮かに浮彫りにする役目を果たしているのである。

さらに、紫上の扱い方を見ていっても（人知れず北山から引き取る所、秘かに結婚する所）このことが一層明瞭となるのであるが、流謫後の権勢家として変貌した源氏には、もはやそういった類の邸は必要でなくなつてきていた。その上、青年期に關係した女性達の処遇を考えねばならない必要に迫られてもいた。さらに紫上が、須磨巻において世俗の困難事を克服することのできる才覚を身につけ、実質的な妻の座を獲得し、隠处的性格を持つ二条院では彼女の運命を背負い込めなくなつてきたのである。また、絶大なる権勢確保に伴い、それにふさわしい邸を構えようとしたことも、脱二条院の一つの必然性と言えるであろう。

薄雲巻は、源氏、紫上共に一つの過渡期、転換期と言える。若い一途な恋愛人としての源氏から政治家としての源氏に、好色者から実意人^{まめ}へ、濡標巻以後顕著になつてきたこの変化が確固たるものになる。紫上も妻としての立場が不動なものになり、先の脱二条院の必然性はここで煮詰まつたと見てよい。

また、源氏が作者から与えられたものは、容貌、性格、学問、才能から宿世に至るまでほとんど言語に絶した美質であり、「ゆゆし」「この世のものならず」というような理想性、超越性を示

示す言葉が彼の描写には常に用いられていた。作者が源氏設定において賦与した属性であるが、この超越的存在者としての源氏がやはり理想的な藤壺を求め続ける。彼女はいつもヴェールの中にいて姿を見せなかったが、源氏の生活全てを（恋愛も政治をも）左右してきた。いわば聖なる愛とでも言うべき二人の愛が、源氏自身の理想性、超越性を確保していたと言える。ところが、この聖なる愛が藤壺の死によって崩れ、源氏には新たな依り所が必要となってきた。その時人間紫上の空間であるところの既存の二条院では意味がない。源氏のため、さらには物語を進展させるために、新たな場面が必要となってきたのである。

以上のような脱二条院の必然性が、物語内部から六条院の造営を要請するのである。

さてここで、もう一度薄雲巻を見ると、藤壺を除く四人の登場人物が、後の少女巻の六条院の住人と一致していることに気がつく。しかし秋好中宮、花散里に関する記事は別になくてもさし障りはないように見える。この二人の坐りの悪さから、この時すでに作者が六条院構想を抱いていたとは考えられないだろうか。六条院構想に合わせるために、秋好中宮と花散里の所で無理が生じたのではないだろうか。実際、明石君の姫君を渡す姿には、物寂しい大井の里を背景にして、ぴんと張りつめた空気が流れており、

このあたり、六条院の冬の御方としての配慮が充分なされていると言ってよいであろう。さらに秋好中宮についても、源氏の言葉は春秋の定めに移り、彼女は秋を好む女性として規定される。春を好む紫上と共に、六条院の御方としての構想がすでにできあがっていたと見てよいであろう。

また、花散里については、秋好中宮と源氏の対面の場において、源氏の話題が彼女に及んだのは、その人物像を完成せしめるためではなかったのだろうか。つまり、少女巻において花散里の容貌を明らかにするにあたって、六条院の御方としてその心ばえの良さを強調しておく必要に迫られたからであると考えることができ。薄雲巻以後、朝顔巻にも彼女についての描写があるが、巻を追うにつれ彼女の心ばえが上昇せしめられているのも、読者にすぐれた人物であることを納得させ、六条院に迎え取られるにふさわしい人物であることを認めさせるためだと考えることができる。

このように徐々に条件が具備され、物語は六条院への展開を義務づけられていくのである。

四 新邸造営

実際に物語に明示されている新邸造営の理由は、式部卿官の五

十賀のためということのみであるが、さらに別の理由が考えられるのである。内心では恋しく思っている養女秋好中宮を、退出の時だけでも側に置きたいという源氏の好色心も理由の一つにあげられよう。しかし今の源氏には、秋好中宮に対する懸想を現実化するだけの行動力がない。いわば閉鎖的性質の恋であり、それが六条院を、源氏の家族圏によるみやびの業にまで昇華させていくことになる。彼女に向かって家門繁栄の願いを述べる源氏の言葉からもこのことが言えるのである。

また、二条東院造営後すぐに六条院が着工されるというのは、急ぎすぎるような印象を受ける。これは如何にも不手際のこととで六条院構想は二条東院構想中の創作意図の変化とされる御説もある。^(註2)しかしながら、源氏や夕霧の官位を考える時、それが勢力誇示の役目を果たすものであることが明らかになる。つい最近邸を造ったばかりなのに追いかけてさらに大きな邸を造るということは、自身の政権の確固たることを他の人に示すことになる。

以上、六条院構想の必然性、造営理由を考察してきたのであるが、そこに入居せしめられた紫上、明石君、秋好中宮の三人には六条院に入るべき必然性があったが、もう一人の女君花散里も、彼女についての記事を見ていくに従い、源氏物語中有数の人格者であったことがはっきりしてくる。源氏の生涯の目立たない支柱

の一つであり、源氏は彼女に一目置いていたと考えられる。「花散里も僅か三年足らずの間に再度移転させられているのは構想上如何にも不手際で、二条東院は六条院とは全く無関係であったと見るべきである。」^(註3)という御説があるが、源氏が重んじている女性であれば、栄華を誇るという目的も背負っている新邸が造営された時、そこに移るということに対して少しの不自然さも感じない。

六条院は四季の構造を持ち、季節の運行によって秩序づけられた女性達の中央に源氏が位置づけられ栄華を謳歌していくのであるが、四季に配するにはそれに見合った特性を持っていることが必要であった。ここに入居せしめられた女君についての描写を見る時、季節と人柄、あるいは出来事が調和するような配慮が十分なされていたことに気づく。四人の六条院の女君は季節によって捉えられ、自然から切り離し得ないものとなっている。つまり、作者の胸の中には四季の構造を持つ六条院というものがすでにあり、その季節の何処に誰を配置するかの下固めが徐々になされていたのである。そしてその性格付けが完全になった時点で、初めて六条院構想を表面に打ち出したと見てよいであろう。今やこの四人の女君と自然、女君と六条院は不可分の関係になっているのである。そして、みやびの中心舞台とはなり得なかったが、その

四季構造からはみ出した女君達を収容するために、二条東院はその必要性を失なっていないからである。

六条院は二条東院からの発展なのではない。むしろ対照的存在と言ってよいものであった。東院はそこにおける物語を展開せず、また展開するだけのエネルギーを内包していなかったが、それなりの必要性を有していた。明石君の拒否の対象となることによってそのあり方が照らし出され、さらに大井山荘の必要性にもつながっていく。東院における花散里、大井山荘における明石君、というように、六条院の女君を設定していく上で必要不可欠の存在であった。二条東院、大井山荘は共に、六条院への予備的任務を背負わされて物語へ登場してきたのである。さらに、二条東院は若かりし源氏に貴重な体験を与えながらも主要人物とはなり得なかった女君を収容する場としての役割も担い続けていくのである。六条院構想は少なくとも少女巻に明示される以前から作者の胸の中にあつたのであり、あらゆる角度から条件が整えられ、全て満たされた時点において初めて全容を明らかにする、そういう方法を作者は採ったようである。

六条院構想はあらゆる方面から要請されるものであり、その造営は必然的なものであった。そして、これからの物語を進展させ

ていく上でも、必要不可欠なものなのである。

この論は、「元来は二条東院を構想していた作者が、六条院の構想にまで新たに発展させたのは、ここに創作意図の変化があったからに相違ない。」という高橋和夫氏の御説とは異なり、あくまでも六条院構想は、少女巻に明示される以前からあったと解する立場に立つのであり、そこに到達するために作者が用意した諸条件、物語内部からの要請を見極めることを目的としたことを、ここに断っておく。

註1 大朝雄二「六条院物語の成立をめぐって」文芸研究57 昭42・

11

註2・3 高橋和夫「二条院と六条院」国語と国文学 昭26・9

(昭和五十三 日文学)